

牛鍋と人力車

新しい時代や、時代の変わり目などには、よく奇想天外な人物が現れる。文明開化の明治時代にも、牛鍋の流行を見て、いち早くチェーン化を図ろうとした男がいたのである。その名を木村莊平。はて、どこかで聞いたような？といぶかる向きに種明かしをしておく、かの「牛肉店」と題する代表作で有名な画家・木村莊八氏は、実はその息子である。この莊平なる御仁、子どもの名前にはみな上に「莊」の字をかぶせ、そのあと誕生順に一、二、三の数字をつけたというから、これだけでも変わり者だったことが分かる。

この莊平さん、牛鍋屋のチェーン化に当たって考え出したのが、何と屋号に「いろは」の四十八文字をつけること。その第一号店「い」の店を出したのが東京・芝の四国町で、明治十一年ころには東京十五区内に全て支店があったというから、今日流行の牛丼チェーンもその「先見性」にはとても及ばない。

はじめは東京中にいろは四十八店を作るつもりだったらしいが、「い」から「ね」までの店を作ったところでそれ以上の拡大を思いとどまった。というの



も、この牛鍋屋い・ろ・はの経営はすべて彼のおめかけさんに任せるとい
 が彼の方針で、いかに奇行の持ち主でも、二十人のめかけを集めるのが精一杯
 だったか。が、それにしても毎日一度は必ず各店に顔を出し、細かく売り上げ
 を点検することにしていたのだから、今の二十三区ほどではなかったにしろ、
 市内十五区を毎日くまなく駆けめぐるといふのは、容易なことではない。で、
 彼は、当時文明開化の乗り物としてカッコよかった人力車に目をつけた。しか

も、これを奇抜な赤塗りにした上、普通一人
 で引く所を三人引きにして、人目につくよう
 な格好で市内を駆けめぐらせた。

かくて、彼は一役有名となった。その結果、
 牛鍋のチェーン店も二十店を数えるほどの大
 成功を収めたのであったが——その息子が、
 「牛肉店」という名作を生むことになったの
 も「牛鍋」をめぐる奇妙な縁といえよう。